



MINISTÈRE
DE L'ÉDUCATION
NATIONALE

EBE JAP 1

SESSION 2019

**CAPES
CONCOURS EXTERNE**

**SECTION LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES :
JAPONAIS**

COMPOSITION EN JAPONAIS

Durée : 5 heures

L'usage de deux dictionnaires unilingues en langue japonaise (un dictionnaire de langue et/ou un dictionnaire de kanji) est autorisé.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel informatique ou électronique (dictionnaire électronique, ordinateur, téléphone, calculatrice ou autre) est rigoureusement interdit.

Si vous repérez ce qui vous semble être une erreur d'énoncé, vous devez le signaler très lisiblement sur votre copie, en proposer la correction et poursuivre l'épreuve en conséquence. De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, vous devez la (ou les) mentionner explicitement.

NB : Conformément au principe d'anonymat, votre copie ne doit comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé consiste notamment en la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de la signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie.

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

► **Concours externe du CAPES de l'enseignement public :**

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
E B E	0 4 3 0 E	1 0 1	7 8 2 1

以上のテーマについて、それぞれの次の4つの資料の比較分析に基づいて問題提起をし、構築された論文を日本語で書きなさい。

資料 1 :

移民たちの不安は、もしかしたらブラジルは日本よりもひどいのではないかという事であった。それではまるで地獄の景気を見に行くようなものである。

5 真暗な海面からミルク色の濃いつめたい霧がひたひたと寄せて来た。閉め切ったドアの隙間から、丸窓の間から煙のように船室へ霧が流れこんだ。するとマストの上の真紅な航海灯は二間四方だけしか照らさなくなつた。船は何一つ見えない海にむかつて、長く尾を曳いてサイレンを鳴らした。十一ノット、九ノット、とうとう六ノットまで速力をおとして、希望峰の沖を回っていた。今夜のうちにケエプタウンの港外に着けるはずであったが、皆目見当がつかなくなつた。

10 ブラジルの不況が口々に語られるのを聞くと、佐藤孫市はいよいよ三年目に姉を帰らせる可能性をも失つてしまった。彼は姉に何と言つて詫びていいかわからなくなつていた。お夏は弟から何も言われなくても、とうとう自分が帰れなくなつてしまったことをよく知つていた。堀川さんとのことももうすっかり諦めていた。縁が無かつたのだ。縁のない人のことをいつまでも考えて見ても(馬鹿臭くつて、話になんねえべ…)

15 案外にさつぱりと過去をふるい落して将来の未知の運命に従つて行こうとする彼女は、あるいは大変に現実的な女であつたかも知れない。

20 このような不安は門馬勝治にもあつた。愚かな弟と年老いた母とをかかえた彼は、ブラジルで佐藤孫市たちと別れてしまうことについて、急に心細い気になつていた。そこで彼はポートエリザベスの沖を通るころ、逆波のしぶくデッキのベンチレータの陰で、もう一度お夏に言った。

「この前俺が言ったことな考えて見てくれただか？」

お夏は黙つていた。

「若しかお前さええかったら、俺あちやんと家をもつて、やつて行くべと思つどもな。その方が何ぼか都合ええべ？ それとも、お前やつぱり日本さ帰る気だか？」

25 勝治は遠慮ぶかい気の弱い青年で、彼女には指一本さわるでもなく、憂^{うれ}わしげな顔を傾けて訊くのであつた。

「帰るたつて、帰られたもんでねえ」とお夏は深い溜息^{たらいき}をついて言つた。勝治はお夏の気持ちが気の毒になつて、暫く黙つていた。

石川達三『蒼茫』1935年（新潮文庫、1993年）

資料2：



海外興業株式会社『さあ行こう 一家をあげて 南米へ』（大正末期）

資料 3 :

あのころの父と母はいったいいつまでアメリカに留まるつもりでいたのだろう。当時のアメリカは圧倒的に豊かだった時代の名残りをとどめ、通りすがりの客にも the American dream の片鱗^{へんりん}を味わわせてくれた。それもあってかれらはいつまでもいつまでもアメリカに残ったのであった。ところが私たち姉妹は成長期にあった。育ちゆく途中⁵で根を植え替えられてしまった私たちは、かれらと同じような意味でアメリカを享受^{きやうじゆ}することはできなかった。

もちろんニューヨークのことである。私の回りに日本人がいなかったわけではない。住みついた町では私たち姉妹は中学校始まって以来の日本人として校内新聞に載ったほどだったが、父の勤めていた会社の人たちは事あるごとに家にきて遊び相手をしてくれたし、ごく稀^{まれ}にはあったが同い年ぐらいの駐在員の娘たちに出遭うこともあれば、その中で家族ぐるみでのつきあいが生じることすらあった。だが日本人がいるということ—日本人がいて日本食が食べられ日本語の本があるということ、それらすべてをいくら足し合わせても日本という故郷そのものの代わりにはならなかった。

私は少女時代を通してひたすら日本を思っていた。それは恋しい、懐^{なつ}かしいなどという、情感にかかわる言葉では言い表せない、存在そのもので思うような思い方であった。私は自分の居るべきではない場に自分が居り、自分の居るべき場に自分が居ないという、そのことばかりを思っていた。私にとっての日本が、ひたむきな望郷の念の中で化物のように膨れ上がっていったのは仕方のないことであった。しかもあの年齢をそのような思いの中に生きた私は、それからずっと、この化物から自由になること²⁰がなかった。

初めて日本に帰ったのは奈苗が二十二、私が^{はたち}二十歳の夏である。奈苗はボストンの音楽学校を卒業したところで、私の方は同じくボストンの美術学校を二年終えたところであった。それからは太平洋を行ったり来たりする頻度もふえ、旅人のようにして訪ねる日本の記憶は互いに侵食しあい、いつがいつのことやら混沌^{こんとん}としていった。²⁵だが、初めて日本の空をあおぎ日本の土を踏んだあの二十歳の夏の記憶だけは別のフィルムに残したように鮮明である。

マモナク飛行機ハ東京国際空港ニ着陸シマス。

涙はその「東京国際空港」という言葉を聞いたとたんにあふれそうになったのである。それを、飛行機の車輪が滑走路に着いたときも、飛行機がついに止まったときも、機内の緊張がとけBGMが流れ始めたときも懸命にこらえていたのだった。ところが飛行機の厚い扉が開き、向こう側から制服を着たおじさんが入って来て、ハイお疲れさまでしたと律儀^{りちぎ}な手つきで制帽に手をかけた、その瞬間であった。熱いものはどうしようもない勢いでこみあげて頬を伝わった。あれはアメリカにいる日本人ではなく、日本にいる日本人、日本で働き、日本食を食べ、日本語を話すことがあたりまえの日本人、自分が日本人であるという意識すら持っていないであろう日本人—そういう日本人を実に八年ぶりに目の前にしたのだった。

水村美苗『私小説 from left to right』1995年（ちくま文庫、2009年）

資料 4 :

明治になると、日本本土からたくさんのシヤモ(和人)が北海道へ渡ってきて、農耕に適したいい土地を物色しました。日高地方では、新冠川と静内川に目をつけたのです。この二つの川は、鮭がどつさり遡ってくるいい川で、周囲の山には鹿もたくさんいます。しかも気候温暖で人間が住むにはこのうえない土地柄です。だから、この二つの川

5 川の流域には、沙流川流域と同じように、アイヌ・コタンが点々とあり、多くのアイヌが住んでいました。

なのに、この地にやってきたシヤモの有力者は、明治時代にここを日本天皇家の御料牧場用地と決めたのです。御料牧場をつくるとなると、そこに昔からいた先住者のアイヌが《邪魔》になります。シヤモの役人はアイヌをどこかへ移住させようと企み、その移住先を沙流川上流の山奥、上貫気別と決めました。どんな手を使ったかという

10 と、荷負から上貫気別まで馬鉄(馬車鉄道)を走らせ、さも便利な所のようにみせかけたのです。

新冠から上貫気別までは、山越えをして厚賀川の上流沿いに行けば、歩いて一日の距離ですが、気候とか土地は、前述したように雲泥の差があります。

先祖代々住みなれた豊かな土地から、よその恵まれない土地へ移れといわれても、アイヌたちは納得できません。異議申し立てもしたらしいのですが、圧倒的力をもつシヤモには抵抗しきれぬものではありませんでした。

シヤモは、いやがるアイヌを脅し、まるで足蹴にするようにして新冠を追い出したのです。移転費が多少渡されたいのですが、わずかの金でなんの役にもたたなかつたといえます。『平取町史』によれば、上貫気別小学校の開校は大正五年となつて

20 います。この小学校の沿革をみますと、この小学校は村がそのまま移されてきたことがわかります。

萱野茂『アイヌの碑』1980年(朝日文庫、1994年)